

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 一丸禎子(いちまるただこ)

一丸禎子(いちまるただこ)氏の博士論文《マザリナード文書とは何か——コーパスとしての東京大学コレクション》は、17世紀中葉のフランスにおける、いわゆる「フロンドの乱」の時期に大量に出回ったところの、「マザリナード文書 **mazarinade**」と総称される時事的出版物を研究対象としている。アナール派の歴史学は、「蔵書研究」や、「青表紙本 **bibliothèque bleue**」をめぐる研究といった、書物のコーパスを対象とした研究分野を活性化させてきたといえるが、本研究も、そうした流れに棹さすものと規定することができる。「マザリナード文書」は、政治パンフレットのみならず文学テキスト等も包摂した、学際的なコーパスとして、最近では再評価の動きも盛んであって、なによりも、世界中に散らばっている、公共あるいは個人のコレクションの正確な調査にもとづく、データの集積が求められている。現在、そうしたプロジェクトが進行中であって、本研究はその一環をなすものといえる。

そしてもうひとつ、東京大学においてこのような研究がなされるべき、必然的な理由が存在する。東京大学は、**1978**年に、全44巻に及ぶ膨大な「マザリナード文書」を、**4000**万円余りで購入したが、この貴重なコレクションは、総合図書館において、死蔵された状態に甘んじていた。要するに、本コレクションは、ほとんど具体的に調査・研究されることなく、書庫の奥で眠り続けていたのである。

以上のような状況を受けて、論文提出者は、上記「マザリナード文書」をコーパスとして、その実体を把握し、書誌学的な検証・貢献をおこない、その上で「コレクション」としてのマザリナードの形成と、その定義に迫るべく、研究を実施した。

さて、本論文は、全4巻、総ページは優に **1000** ページを越える大冊である。第1巻が主論文であり、副論文ともいえる第2巻―第4巻が、東京大学総合図書館所蔵「マザリナード文

書」の目録改訂版となっている。

主論文は、「マザリナード文書」の定義にかかわる問題系について考察をおこなうとともに、このこととの関連から、東京大学コレクションを、いわば「実体」としての「マザリナード文書」として、具体的に検証することを目的としている。全体は2部構成であり、第1部・第2部ともに、4章で構成されている。

第1部では、まず辞書の記述に基づいて「マザリナード **mazarinade**」なる用語の誕生と生成とを考察する。次に、この用語の歴史的背景としての〈フロンドの乱〉、および宰相マザランについて、最新の歴史学の知見にもとづいた記述をおこなう。その際、**mazarinade** の語源となったとされる、スカロン『ラ・マザリナード』(1651年)原典テキストを、東京大学コレクション(C-11-7)から起こして、分析し、これが暴力的なまでに「反マザラン」の誹謗中傷文書であることを確認している(第4章)。

次いで第2部では、具体的な「もの」としての「マザリナード文書」を、東京大学コレクションをひとつのケーススタディとして詳細に検証している。まず、購入時に添付されていた目録の不十分さが明らかにされ(第1章)、次に、従来より依拠されてきたセレスタン・モローの『マザリナード文書総目録』に代わって、現在進行中の、ユベール・キャリエによる新たな総合目録作成という試みとの、連帯・連動の意志が明らかにされる。そして、この方針にしたがって、東京大学コレクションの全点調査がおこなわれる(その成果が、第2巻―第4巻にほかならない)。

その結果、さまざまな知見・発見が得られた同時に、今後の課題も多数見いだされた。総文書数が2,700点を越えることが明らかとなり、いわゆる「新発見文書」3点の存在も判明した。また、存在は確認されているものの、現存するものが1―3点と、きわめて希少性の高い文書も、6点含まれることがわかった。そして、「マザリナード文書」の辞書による一般的な定義なるものはくつがえされて、東京大学コレクションが、狭義の「反マザラン」には限定されることのない、多様な文書の集合体であることが、はじめて明らかとなった。

また、スカロンがマザランを対象として「ビュルレスク」形式を採用したことで、この文芸ジャンルが、いわば政治的言説へと横滑りしていき、やがては、反マザランのみならず、マザラン擁護をも含む、広範なテキスト群が「マザリナード」として認識され、かつまた収集されていくことが、具体的な形で確認された。その際、「コレクター」という存在が、大きな役割を演じていたことに注意が喚起されて、この切り口から、複数の「下位コレクション」に対して考察・推理がなされる。たとえば表紙が青い文書が含まれている事実から出発して、刊行地の推定、いわゆる「青表紙本」という同時代の（民衆的と規定されたりする）テキスト群との隣接性といった、興味深いことがらにも、記述は及んでいる。そして、マザリナードが、散文体から韻文体に焼き直されて流通していったという指摘なども、今後の受容研究の際の大きなヒントとなると考えられる。

本論文は、こうした詳細な検証を経て、「コレクター」の数だけの文書群が構成されて、やがては、それらが「マザリナード文書」と総称されることになったプロセスを記述したものといえる。

17 世紀が好奇心・コレクションの時代であることに留意するならば、結論そのものには、目新しさはないのかもしれない。しかしながら、本論文の決定的な価値は、3000 点近いテキスト群を具体的に検証して、膨大な目録を作成し、さまざま論点を提示したことなのであって、論文執筆者の長期間にわたる努力には、心から敬意を表したい。本論文により、マザリナードの生産・流通・収集・受容といった局面で、「ビュルレスク」「コレクター」、あるいは「青表紙本」や「版画工房」といった存在が、さまざまな機能を担っているという現実が、明らかとなったわけで、貢献度はとても大きい。こうした主題設定からの、今後のアプローチも期待される。そして何よりも、そうした研究の際に、基礎的な資料となる目録の完成を高く評価したい。今後はむしろ、この成果を日仏において、いかなる形で発表・刊行していくかが課題となろう。

目録の記述方法・体裁などに関してアドバイスはなされたが、本論文は、学術的に多大な

貢献であり、当該分野における卓越した研究成果であるとの評価は、全員に共通のものであった。したがって、本審査委員会は、本論文を、博士(学術)の学位を授与するのにきわめてふさわしいものだと認定する。